

大川悦生・作

太田大八・絵

白いきつねの絵馬

—東京のはなし—





作家

大川悦生

（おおかわえつせい）

一九三〇年、長野県に生まれる。早稲田大学卒業。「民話を語る会」「東京のむかしを聞く会」を主宰している。著書に、「おかあさんの木」「デゴイチおんちやんの話」「えすがたあねさま」（以上ポプラ社）「現代に生きる民話」（NHKブックス）などがある。東京在住

画家

太田大八

（おおただいはち）

一九一九年、長崎県に生まれる。多摩美術学校卒業。小学館絵画賞、オーストリア・イラストレーション奨励賞（一九七五年、あめたろう学研）などを受ける。作品には、「まほうこうじょう」（大日本図書）「けむり仙人」（ポプラ社）など多数ある。東京在住

カラー版

創作えばなし

26

白いきつねの絵馬

1976年5月 印刷 ©

1976年5月 発行

作

大川悦生

絵

太田大八

発行者

久保田忠夫

発行所

ポプラ社

東京都新宿区須賀町5

写植

誉工房

製版

光明社

印刷

名古美術印刷株式会社

製本

大成紙工業所

おまの
の
絵



大川悦生・作

太田大八・絵

—東京のはなし—

おいらは 東京^{とうきょう}の きつねです。

それも みんな 下町^{したまち}うまれ。まあ、ちやきちやきの

江戸^{えど}っ子^こぎつねって いう わけですよ。

おいらの なかまは 山^{やま}のきつねと ちがって、からだが

まっ白^{しろ}。おまけに、まい年^{とし} まい年^{とし} なん千^{せん}びきも

きようだい^{きようだい}が うまれました。

——え？ いまごろ 東京^{とうきょう}に

なん千^{せん}びきも きつねが

いるもんですか、って。

いや、いや、いますとも。

けっして うそは いいません。

おいらは かみさまに

つかえる きつねですからね。



赤い^{あか} とりいが

たっている

おいなりさんと

いったら、どこにも

あるし、だれだって

しってるでしょう。

むかしから

東京^{とうきょう}の ちかくの

村^{むら}むらでは、

二月^{にがつ}の はつうまに[※]

おいなりさんへ きつねの

絵馬^{えま}を たくさん

おさめてきました。

※はつうま(初午)……二月^{にがつ}の最初^{さいしょ}の午^{ひま}の日^ひのお祭り



白^{しろ}い きつねは、こくもつのかみさまのおつかい。だから、おひやくしようさんが「ことしもどうぞ、お米^{こめ}をどつさりみのらせてください。」とねがって、おいらをおさめたんです。——ふーん、絵馬^{えま}にかいたきつねなのか。じゃあ、いきたくないんだ。

とんでもない。いきていないっていわれちゃあ、

はばかりながら江戸^{えど}っ子^こぎつね、とてもがまんがなりません。なにしろ、おいらのなかまは、もう二百年^{にひゃくねん}もまえから

うまれてきました。とのさまぎょうれつが、《下^{した}にい、下^{した}にい》ととおったころのことだつてしつてゐるし、あなたがたがうまれるまえの世^よの中^{なか}も、よくこの目^めでみてきましたよ。

* *

さて、はじめに おいらのなかまが うまれた家^{いえ}ですが、

東京^{とうきょう}にも いまは 一^{いっ}けんきりしか ありません。

そこは 下町^{したまち}といたつて、だいふ 北^{きた}よりの ふるい町^{まち}。

むかし ほんとに とのさまぎょうれつや、わらじがけの たびの
人^{ひと}が とおつた かいどうばたに、

絵馬^{えま}屋^や

と いう かんばんが、ひとつ ぽつりと たつています。

ほかには なんにも かざりつけがない、ごく ちつぽけな
みせだけど、おいらたちは みんな ここで うまれたんです。

つい 四^し、五年^{ごねん}まえまでは 年^{とし}とつた しょくにんさんが、

みせさきの しごとばで こつこつと 絵馬^{えま}を かいていました。

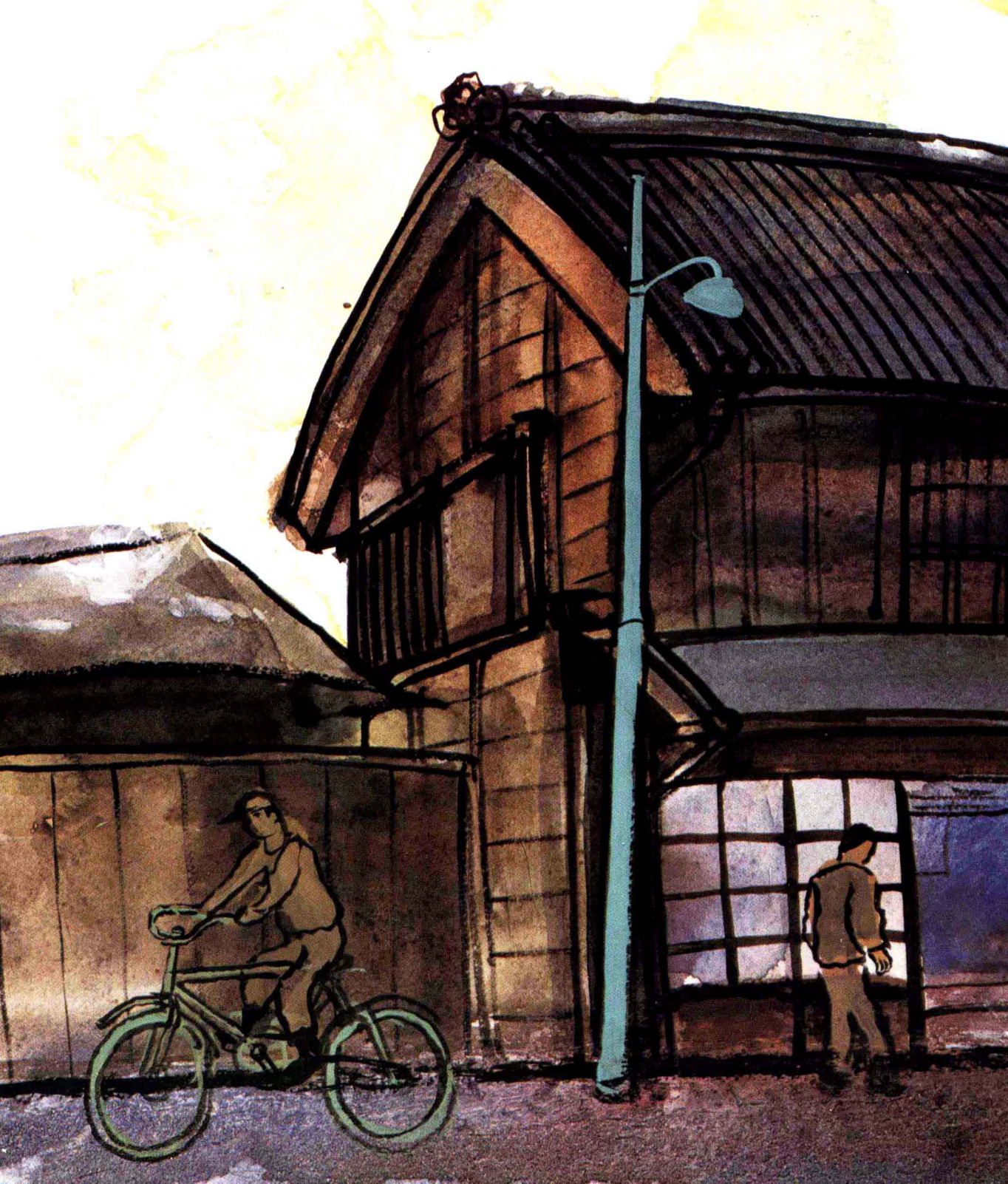
あたまは まつ白^{しろ}、ぶあつい ろうがんきようを かけ、

ほそい えふでを うごかしながら、

「わたしで 七代目^{ななだいめ}になりますな。ずうっと こればつか
かいてきたんですが、なに、もうかりやあ しません。」

と、ぶつきらぼうに いたりしてね。この しょくにんさんが
東京じゅうで たったひとりの、さいごの、絵馬師^{えまし}でした。
そして、おいらを うんでくれた おとうさんだったのですよ。





絵馬^{えま}は きれいな

白^{しろ}みの すぎの木^きで つくりま^す。

五^ごかくけいに きった うすい いたへ、

とんとんと やねや ふちを

うちつけて、ちようど 家^{いえ}の

かたちにし、それから、

にかわで といた どろえのぐで

一^{いち}まいずつ かいていきます。

十二^{じゅうに}支^しの どうぶつの、

ねずみや うさぎや とらや

うしや うまのも あります。

うなぎだの わらじだの、

おじぞうさまだの てんじんさまだの、



また『め』の字を かいたのも
あります。

けど、まあ、絵馬と

いったら、東京の 絵馬じゃ

おいら きつねでしょうね。赤い

とりいのまえで、白いきつねが

二ひき、『ほうじゆの玉』って

たからものを まもり、

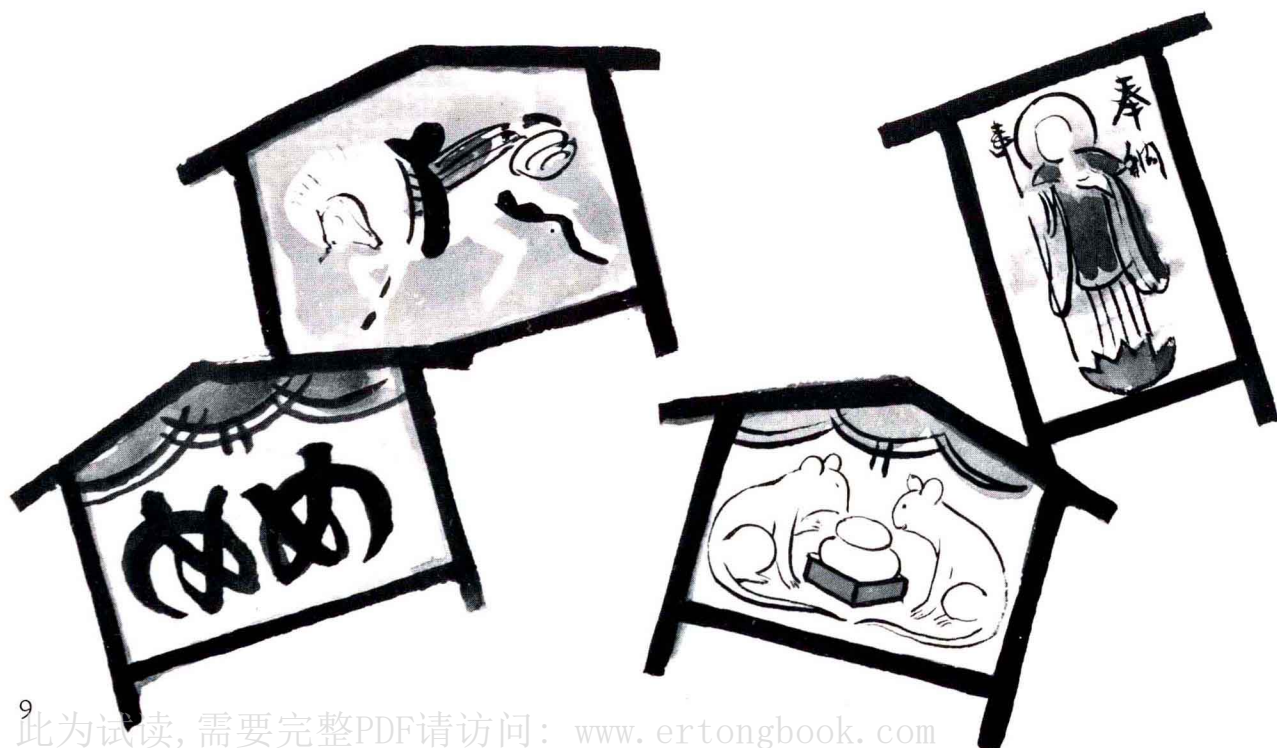
むかつて 右がわの きつねは

米ぐらの かぎを くわえている。

大きいのや 小さいのを

たくさん ならべてみたら、

そりやあ みごとなもんですよ。



絵馬えまをつくる 絵馬屋えまやさんは、まい年とし、十一月しゅういちがつごろから

いそがしく なりました。つめたい こがらしが 町まちを

ひよひよー ひゅーっ

と ふきぬけるころに となると、おそくまで よなべでした。

おとうさんには おでしさんも こぞうさんも ありません。

おかあさんと むすめの りょうさんとに てつだいを

させるのですが、うんと おこりんぼでね、

「なんだい、この かたおしかた（きつねの 型かたを）はんで おすこと）は！

こんなんじゃ、せつかくの きつねが しんじまうよ。

ねむかったら、かおでも あらつてきて やりな。」

と がみがみ いいます。

おいらには、そんな おとうさんの きもちも よく

わかりました。



だつて、東京とうきょうという 大きくて めまぐるしい 町まちのなかで、
むかしからの 手てしごとを まもりつづける。それも たった
ひとりで やつていくのは、たいへんだつたのですよ。
よつぽど きもちが しっかりしていて、しごとに きびしい
人ひとでなかつたら、つづくもんじゃ ありません。

でも、むすめの りょうさんたちは かわいそうでした。

おこりんぼな おとうさんが こわいから、いつも

「はい、はい。」つて いつていたけど、ほんとね、

「わたし、どうして 絵馬屋えまやさんなんかに うまれたんだろ。

ふつうの おうちに うまれれば よかつたわ。」

と おもっていました。

なぜなら、おいらを うんでくれた 絵馬屋えまやさん一家いっかは、
一いっけんしかない しょうばいなのに とても

びんぼうだったのです。そういえば、りょうさんが 小學生しょうがくせいの
ころ こんなことが ありましたつけ。

* *

あれは 日本にっぽんが せんそうに まけて、三さん、四年よねんたった
ときでした。

東京とうきょうでも アメリカ兵へいと やみ屋やばかりが いばっていました。

お米こめも パンも おなかいっぱい たべられなかつたし、まだ

やけトタンの バラックが さむざむと ならんでいたんです。

さいわい 絵馬屋えまやさんの あたりは、くうしゅうで やかれずに
のこっていましたから、小さいちい りょうさんは、

「わたしたち、ちゃんとした おうちが あつて

しあわせなのね。」

と、子どもこもごころに おもいました。

「せんそうに まけても 江戸っ子が いきてるうちは、

絵馬だつて しにやあしない。もうしばらくの しんぼうさ。」

おとうさんも 元気で、のみたい おさけを がまんしながら
せつせと 絵馬を かきました。

おいら みんな うれしかったですね。

——そう こなくつちや 江戸っ子じゃないよ。おとうさん
がんばつて！ りょうさんも はやく 大きくなつて！

おいらたちは いっしょうけんめい おうえんしました。

なのに、小さい りょうさんは 年のくれが ちかづく、
ひどく さびしそうな かおをしました。

それつていうのが、おいら きつねの 絵馬は、二月の

はつうまが こなければ うれないんです。クリスマスも

お正月も いそがしいばかりで、絵馬屋さんには おかねが

はいりません。もちろん、おつとめを ひと している 人のように
ボーナスなんか だれも くない。

「うちにやあ、お正月は しょうがつ こないんだ。いいか、おまえたち、
わがママを いって、かあさんを こまらせるんじゃないぞ。」
おとうさんは いつも 子どもたちに いっていましたよ。

おまけに、女だけ おんな 三人きょうだいで さんにん

いちばん うえ 上だった りょうさんは、

三年生 さんねんせい の 年 とし から、

「これ、りょう、

あそんでいるなら

ここへ すわって

てつだいな。」

と いわれました。

